山形大学大学院社会文化システム研究科紀要　第六号　別刷
平成二十一年八月

特集にあたって

地域史研究と史料・方法の開拓

人文学部地域史プロジェクト（代表　岩田浩太郎）

特集にあたって

地域史研究と史料・方法の開拓

本特集は、二〇〇七～〇八（平成一九～二〇）年度科学研究費補助金・基盤研究（C）「出羽山形の地域特性の歴史的展開に関する基礎的研究―山形地域史の再構築―」（研究代表者・岩田浩太郎。課題番号一九五一〇二四四）の成果の一部をまとめたものである。

右の科研に参加したメンバーは本学大学院社会文化システム研究科文化システム専攻のスタッフからなり、岩田浩太郎（日本近世史）・菊地仁（日本文学）・松尾剛次（日本宗教史）・三上喜孝（日本古代史）である。また、研究協力者として本学地域教育文化学部の伊藤清郎先生（日本中世史）に参加いただき、研究会で出羽山形の中世・戦国史や庄内の民俗などに関する助言や報告をいただいた。

本プロジェクト研究（通称:地域史プロジェクト）は、山形の地域史や地域文化に関心をもつ教員有志の交流に端を発し、二〇〇四（平成一六）年度に人文学部の研究活動支援制度に応募し採択されたことなどを基盤に本格化し、出羽山形の地域特性の歴史的展開に関する共同研究を継続してきた。この間、本誌創刊号（二〇〇五年三月）に特集「交易・交流からみた出羽の歴史文化―山形の地域特性の歴史的形成に関するフィールド研究―」（論文四本）を組み成果を世に問うた。また、二〇〇人規模のシンポジウムを二度開催し、ひろく地域の研究者や文化財担当者、市民と議論をおこなった（公開学術報告会「交流史からみた山形―地域史への諸提言―」二〇〇七年一〇月・於山形大学、「修復記念 文殊騎獅像講演会」二〇〇八年六月・於山形大学）。さらに、二〇〇四年一一月より〇九年六月までに小規模なプロジェクト研究会（公開を含む）を一九回開催し、メンバーの個別報告と議論を蓄積した、などの諸活動をおこなった。

今回の企画は本プロジェクトの特集第二弾にあたる。特集のテーマを「地域史研究と史料・方法の開拓」とした。山形の歴史や文芸を素材に、地域史研究を前進させるあらたな史料や方法の模索・検討をおこない、またその意義について論じた四本の論文を掲載した。

三上論文は若松寺観音堂（山形県天童市）の壁面などに書かれた、戦国末期から近世初期にかけての落書きを地域社会研究の史料として意義づけることを試みている。とくに全国の地方霊場に共通する定型の落書きがみられることを確認し、地方観音霊場の興隆と全国巡礼者の交流の様相を活写している。さらに巡礼者たちの書く能力や落書きの背景となった物語などの考察もおこない、当該期の地方霊場や巡礼者たちの文化的な環境にまで迫っている。

松尾論文は山形最上家と縁の深い妙円山宝光院（山形県山形市）に所蔵されていた文殊菩薩騎獅刺繍像を素材に、刺繍された文殊像や文言の分析から、不明であった制作者について考証した。最上義守の妻永浦尼が夫と息子義光の上洛の旅の安全と武運長久を祈って刺繍したものであることを解明し、日本唯一である天台系文殊刺繍像の作成意図を出羽戦国史のなかに位置づけている。寺史や刺繍像の伝存来歴をも考察し、刺繍仏を地域史資料として活用した論考である。

菊地論文は全国でもトップクラスの〈花咲か爺〉採録数を誇る山形県の昔話の形成ないし変容過程について、口頭伝承の話型の比較検討を手

がかりに考察している。結末を「屁」による致富とする独特な昔話「赤いこん箱（屁ひり爺）」が山形で伝えられていることに着目し、〈花咲か爺〉よりも〈屁ひり爺〉で終わる方が古い話型であるかもしれず中国や韓国の昔話とも源流が通じる可能性があることなどを指摘した。昔話を素材に、地域間の文化的な交流・伝播の歴史に迫った論文である。

岩田論文は戦後の地主制史研究などで一時注目されたが活用されなくなった山形県地租改正期の立附米調査の書上帳に関する史料研究である。これまで不明であった書上帳の作成過程や性格について考察をし、史料批判が不十分であった先行研究の問題点を指摘し今後の活用法を提起した。そして、谷地新町村（山形県西村山郡河北町）の書上帳の発掘とそのデータ抽出を試み、一村全戸規模の農業構造及び階層構造分析ができる一級の史料としてその意義を論じている。

本特集が、出羽山形をはじめ地域史の各分野における史料・方法の開拓に結果すれば幸いである。また、本特集をもって、わたしたちの地域史プロジェクトの第Ⅰ期を終了する。五年余の間、あたたかい支援をくださった関係各位に感謝したい。

なお、今回の科研・基盤研究（C）による成果の概要は「成果報告書」（国立情報学研究所データベースで順次公開とのこと）にまとめた。そのなかで出羽南域内陸＝村山地方における地域特性の歴史的展開について通史的な概括を試みた。試論の域を出ないが、本プロジェクトの成果の一部を集約したものであるので、以下参考までに掲載する。

「出羽南域内陸＝村山地方は、奥羽（東北）日本海側では降雪の少ない恵まれた自然的地理的条件により地域の生産力が高く、明治期の稲作生産力は東北の中ではわずかに庄内地方とともに全国平均を越える水準にあった。その背景には古代中世以来の地域生産力の発展があり、近世期における稲作改良と畑作特産物生産（紅花・青苧・煙草・桑作養蚕など）の展開の歴史が指摘できる。また、環日本海の交流および日本海運・最上川舟運などの条件も相まって、古代出羽国府の内陸移転は従来説よりも早い九世紀末以降の段階で実現された可能性も考えられ、さらに奥羽のなかでは早い一一世紀前半には摂関家領を中心に荘園の成立が広範にみられた。こうした政治的経済的な発展を基礎に、立石寺・慈恩寺・出羽三山などの宗教文化的な活動も奥羽のなかでは顕著に展開され、とくにこれまで未解明であった中世羽黒修験の霞組織は東日本各地に組織化されその勢力が東日本を覆っていたことの実証研究を進めることができた。出羽南域内陸＝村山地方のこうした政治的経済的宗教文化的な条件は都市形成にも結実し、古代出羽国府の内陸移転や中世奥羽の管領探題職を一時期掌握した斯波氏の山形城などの諸段階を経て、最上家五七万石の拠点としての山形城郭・城下町建設に至る。近世初頭の山形城郭・城下町は当時奥羽有数の大城郭・大都市であったと推察でき、出羽南域内陸＝村山地方の歴史的発展の所産と評価できる。それは、斯波氏の高権を継承し徳川家より「奥羽の押さえ」として期待された最上家の自己意識を象徴するものでもあった。最上氏改易後、武家人口は減少するが、近世中期以降の山形城下町は、地方民間需要の成長に支えられたいわば「奥羽の商都」として広域的な商圏をもつ奥羽有数の中継商業地として発展していったと評価でき、従来不明であった繁栄の実態を検証することができた。その基盤には奥羽内陸部に深く入り込み他に例を見ないほど整備され活況を呈した最上川舟運などの近世交通体系や紅花・青苧による上方との直接取引により山形商人が奥羽のなかでは抜きんでた全国商業＝金融網を構築しえていたなどの条件があった。同時に、山形城下町は奥羽の宗教拠点として諸寺院が集中配置され、また出羽三山信仰の参詣拠点としても盛況を呈した。近世の出羽南域内陸＝村山地方は従来譜代大名の左遷地ないし全国所領配置の石高調整地＝「非領国」化した不

安定地としてみられてきたが、むしろ最北の幕府直轄地が存在しかつ譜代大名領が集中する「奥羽の押さえ」の地として、同じく高生産力地帯であった庄内地方とともに公儀が重視した地域として把握すべきである。明治期に大久保利通による東北開発構想を受けて三島通庸が山形に初代県令として送り込まれてきたのも、当該地域の経済発展をはじめ歴史的な蓄積を掌握しなければ東北開発が着手できなかったからであったと考えられる。明治一〇年代に東北・北海道開発や外圧＝軍事海防論の観点から帝都の内陸遷都が議論された際に民間知識人が山形を一候補として主張したのは暴論ではなく、出羽南域内陸＝村山地方の歴史的発展に現実的な根拠を置くものであった。その後、明治国家による太平洋側の社会資本整備を中心とする経済政策や交通体系再編により山形の地位は大きく変化し、いわゆる「米と繭の農業構造」に対応する産業＝商業機能に編成替えされ、近代が作り出した東北イメージを典型的に体現する地域となっていくが、産業革命期にいたるまで山形はその活発な経済文化活動により奥羽（東北）における物流交易・宗教文化交流などの拠点として位置付いていた。これらの歴史的遺産は、現在の村山地域の人々の、いわゆる藩領国地域における「藩風」とは異なる開放進取の気質をはじめ、東北のなかでは革新的な山形商法の伝統、高度に発達した地主豪農商の旧家文化、出羽三山・立石寺などの宗教文化、青苧織の伝統を引き継ぐ地場産業、海産物を取り込んだ内陸食文化、祭り芸能や教育を含む地域民俗文化の伝統など、今日にも様々な形で残され、山形の歴史風土を形づくり影響を与え続けているととらえられる。」

（プロジェクト研究代表者　岩田浩太郎）

Special Issue
Regional History and the Development of Historical Materials and Methods

MIKAMI Yoshitaka
MATSUO Kenji
KIKUCHI Hitoshi
IWATA Kotaro

When conducting research in regional history, uncovering historical materials that had been unknown and using them in research leads to the clarification of previously unknown facts and is beneficial. In addition, conducting research using methods that have not been used in research thus far is also important in revealing matters that have not been clarified.

This special edition consists of four papers, each of which seeks to clarify regional history by identifying new historical materials and using new methods. Four persons, Mikami Yoshitaka, Matsuo Kenji, Kikuchi Hitoshi and Iwata Kotaro, have conducted research, in particular, in the regional history and culture of Yamagata prior to the Meiji Restoration.

This special edition is the outcome of a project of the Yamagata University Faculty of Literature and Social Sciences (representative: Iwata Kotaro).